釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

□中□

未開分野に種をまく

釧路で意欲的な演奏活動

ハープ

板本　絹子さん

＝釧路市武佐二の一三＝

心にじかに伝わる響き

優雅な形と美しい音色、そして自分の指を弦に直接あてて音を出すから、その響きがじかに心に伝わってくる―板本さんが語るハープの魅力である。

釧路市民文化会館がオープンした五十四年秋、釧路市芸術祭参加公演「ソリストのタベ」で、釧路の音楽ファンは初めてその魅力に生で触れ、感銘を受けた。それまで、釧路ばかりでなく、札幌を除いては北海道でも未開の分野だったハープの、最初の種がこの時釧路に蒔かれた。板本さんが演奏活動を再開した記念すべき日だった。五十七年には、ソプラノの大木敬子さんとジョイント・リサイタル、五十八年のルスツ・サマー・コンサートではN響のメンバーと共演し「プロとして十分に通用する。がんばってください」と励ましを受けた。六十一年九月に釧路市民文化会館でリサイタル、このほか各大会などの記念演奏、この秋に釧路市青少年科学館で行われたプラネタリウム・コンサートなど、意欲的な演奏活動の一方で、五十八年から板本絹子ハープ教室を開き、その発表会も五回を数える。六十年、釧路音楽協会高後賞を受賞した。

演奏歴25年、海外公演も経験

演奏歴二十五年になる。ハープの国際的な権威である日本ハープ音楽院長・三村勉氏メンバーとして出演、また四十二年には同アンサンブルの海外公演にも参加している。高校を卒業するまでに、演奏は三百回を超えた。五十年に日本ハープ音楽院フック・ハープ科を修了し、教育講師の資格を取得する。わが国でも数少ないフック・ハープ奏者の一人だ。道教育大助教授の板本猛さんと結婚のため来釧したのは五十年である。

「種が蒔かれ、芽が出てきたところ。北海道にハープの花が開くまでがんばっていきたい」とハープ音楽への思いは熱い。三児の母。

北海道にハープの花が開くまで頑張りたい…板本さん

に師事してレッスンを始めたのが三十七年、小学校三年生のときだった。東京生まれで東京に育ったが、父の仕事の関係で埼玉県に移ってからも、電車で都内のハープ教室に通い続けた。四十年と四十三年には、東宮御所で行われた美智子妃殿下御前演奏会に三村ハープ・アンサンブルの

親魚捕獲の小屋

釧路川沿岸　シシャモ

釧路沿岸シシャモの釧路川そ上にそなえて、今年も例年通り鶴見橋上流河川敷地でシシャモふ化用の親魚の捕獲作業小屋が作られた。作業は十八日午前九時から捕獲作業に使用する、漁網から小屋がけ用資材を搬入し、釧路市漁協、東部漁協、白糠漁協、昆布森